集成館事業とは

集成館事業は，１９世紀後半に富国強兵・殖産興業をめざした薩摩藩主島津斉彬によって，磯地区に建設された我が国初の洋式工場群「集成館」を中心とした近代化事業の総称です。

日本の南端に位置する薩摩藩は，欧米列強の脅威に常にさらされている地域であり，列強に対抗する軍備の強化が早くから求められていました。薩摩藩では 1840 年代に島津斉興のもと、ヨーロッパの科学技術を導入して海防体制の強化が図られました。

1851 年に藩主となった島津斉彬は、軍備の近代化をさらに推し進めるべく鹿児島市の磯に鉄製大砲をつくるための反射炉やガラス工場などを次々に建設。そして、これらの工場群を「集成館」と名付けました。
斉彬はこの地を中心にして造船や鉄製大砲製造などの軍備の増強に関するものからガラス製造、紡績、写真、電信など、民需や社会インフラ整備に関するものまで様々な事業を展開。江戸時代に，最盛期には約 1200 人が従事する近代工場が鹿児島で操業をされていたのは驚きです。

『薩州鹿児島見取絵図』武雄鍋島家資料 武雄市蔵

また、斉彬はヨーロッパ諸国と対等に渡り合える関係を築くため，産業の育成や、社会基盤の整備にも力を入れます。いずれの事業においても，鎖国政策により西洋の進んだ技術を直接取り入れることが出来なかったため，蘭学書のみを頼りに、日本古来の伝統技術を融合させ，気の遠くなるような多数の試行錯誤を繰り返し，自分たちの力だけで大砲や軍艦づくりに取り組みました。

『薩英戦争絵巻』尚古集成館蔵

1858 年の斉彬の急逝後、集成館事業は縮小されます。それでも 1863 年の薩英戦争時には、斉彬が整備した砲台や大砲が威力を発揮し、薩摩藩はイギリス艦隊と互角に戦ったといわれています。薩英戦争で薩摩藩は，欧米列強との力の差を感じ，斉彬の唱えた近代化の重要性に改めて気づき，イギリスやオランダの文化・技術を導入し，集成館事業を再興し，日本を強く豊かにするための産業化に再び取り組みました。

その後、斉彬の意思を継いだ島津忠義と、実父の久光は集成館事業の再興に取りかかり、富国強兵を推進。最新のヨーロッパの技術を学び、機械を入手するために留学生をイギリスへ派遣したり、ヨーロッパから技術者を招くなどしました。1865 年には集成館機械工場が竣工、1867 年には日本で初となる洋式機械紡績工場である鹿児島紡績所が竣工。薩摩藩は日本最先端の工業施設、技術力をもつようになりました。

明治5年(1872)の磯地区 尚古集成館蔵

明治以降には、集成館事業で活躍した人物が日本国内の工場に技師として招かれ、全国各地の近代化に大きく貢献しました。集成館は近代国家としての日本の礎を築き、さらに日本を豊かな国へと導いた原点の地といえるでしょう。